

10 年 目 の お 手 紙

日常をたのしく、ゆたかに
そしてそれを継続させていく

そんな思いを胸に、
まちの可能性を見つめてきたタウンキッチンが、
2020年7月28日に10歳を迎えました

あゆみはじぐざぐ
おもいはまっすぐ

まちに暮らす一人ひとりが当事者となって、
私たちの暮らしをカタチにしていく。

信念を問いかけながら、積み重ねた10年という歲月。
失敗や挫折を繰り返し、たくさんの学びを得て、
今を迎えることができました。
この10年、事業を続けてこられたのは、
日常をたのしく、ゆたかにしたいと思う、
歩みはじめた頃の目線を忘れずにいたからかもしれません。

つぎの10年。
社会環境が変化し続ける日々。
タウンキッチンも、変化し続けながら、
まちと共に、さらに成長していきます。

このお手紙を読んでいただく皆さまと一緒に、
新しい景色をつくっていただけることを願っています。



まちの可能性を 広げるために

【アイデアを育て、しごとを育てる】

アイデアは星の数ほど無数に。でも、それをアイデアのままにせず、カタチにしていくことは意外に難しい。共にしごとへと育てていく。豊かな地域をつくるために、とても大切な取り組みです。

【情報と経済を、循環させる】

情報や経済は、人の体を巡る血液と同じ。どこかで止まってしまうまいよう、必要なところへ、しっかり届けていく。そのためには、市民、行政、企業、大学など地域みんなが、力を合わせる事が大切です。

【まちの作戦を企てる】

まちの作戦って、何のためにあるのでしょうか。人口を増やすため？ にぎわいをつくるため？ それも大事かもしれませんが、そのまちの人たちにとって、日常を楽しく暮らすための作戦でありたいと考えます。

【資産を活かし、場を営む】

まちにある資産を活かしたい。みんな思うけれど、どうすればいいのかわからない。思いつきでもなく、やりっぱなしでもなく。10年後も地域に愛される営みであることが、これから、ますます必要になってきます。



まちの作戦を企てる

個人を基軸とした新しいライフスタイルや働き方が生まれつつある中、公共が果たす役割も大きく変わってきています。公共施設の立ち上げ、自治体の計画作成、調査業務などを担い、企画だけにとどまらず、その実行に取り組んできた、これまでの10年。これからも、まちに必要な場づくり、仕組みづくり、制度づくりを行っていきます。机上のコンサルティングではなく、実装するところまでコミットするのが、私たちのスタンスです。



実績

国や自治体などの事業を推進 合計 **63** 件

- 「新しい公共」の担い手による地域づくり活動に対する非資金的支援に資するコンテンツ整備のためのモデル事業／国土交通省(2012)
- 地域創業促進支援事業／中小企業庁(2014)
- 東京学芸大学図書館附属カフェ運営事業／国立大学法人東京学芸大学(2014→)
- 地方創生に係る交付金事業 しごとづくり事業／小金井市(2015-2016)
- コミュニティ農園設置に向けた調査業務／小金井市観光まちおこし協会(2019)
- インキュベーションHUB推進プロジェクト事業／東京都(2019→)

専門家として作戦を考える

- “ちいさな企業”未来会議／経済産業省(2012)
- 女性・若者・シニア創業サポート事業 地域創業アドバイザー／東京都(2014→)
- 空家等対策推進協議会／東村山市(2018→)
- 共生・協働の地域社会づくり会議／鹿児島県(2018-2019)
- TOKYO創業ステーションTAMA 専門相談員／東京都中小企業振興公社(2020→)

先進事例として全国から視察 合計 **51** 件

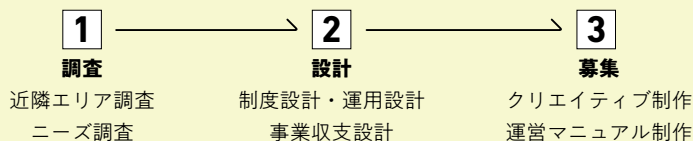
Pick up

小金井市における公共施設を核とした事業推進

PLAN 企 画

住宅街として形成された郊外のベッドタウンに、公共の創業支援施設を開設するプロジェクト。調査に始まり、設計、募集、運営までを行いました。

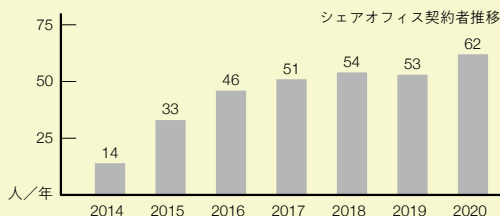
[SOHO・インキュベーション施設開設・運営支援事業(2013-2014)]



MANAGEMENT 運 営

シェアオフィス機能のほか、創業のワンストップ相談窓口として年間200件以上の創業相談や、セミナー・連続講座を開催しています。

[東小金井事業創造センター指定管理者(2014-2017/2017-2022)]



DEVELOPMENT 拡 充

創業機運醸成、エリアブランディング、マッチング支援、子ども向け創業体験、物件コーディネート、市内定着促進などの事業を推進してきました。

[地方創生に係る交付金事業 しごとづくり事業(2015)]

[地方創生に係る交付金事業 しごとづくり深化・拡大事業(2016)]



コウカシタ創業スクール(2014-2018)
経営・財務・販路開拓・人材育成を
学ぶ約3ヶ月全6回の連続講座



ビジネス・マーケット(2016)
食やものづくりなど、テーマ別の事
業マッチングを行う交流イベント



CO-舎(2016)
空き物件を活かした創業者の定着先
支援モデル事業



アイ デ アを育て、 し ご とを育てる

“あったらいいな”をカタチにしていくためには、そのまちに暮らす一人ひとりの当事者意識と、それを支え合う人の関係性が大切だと考えます。これまで、東京の郊外・多摩地域を中心に、セミナー、スクール等を通じて、アイデアを育て、市民による小さな経済圏を生み出してきました。この先の10年に見据えるのは、多摩地域から全国への展開。型の見える化によって、これから必要とされる地域と、まちの自律的な成長に取り組んでいきます。

2014年1月18日[土] 13:30-17:00
WATERRAS COMMON ホール
100名 | 参加費 | 無料
申込先 | 申込先 | 申込先
<http://local-company.org>



金銭のこと、キャリアのこと、暮らし方と働き
たまには関係をもつていっしょに流してみませんか？
そこには僕らと

新しい仲間と出会いがあるはずですよ。

国内外、地方に広がる、魅力的な企業が
東京、お墨の水に集結します。

新しい一年の始まりに

「あなたのシフト」を見つめてみませんか。

しごとをつくるベースキャンプ
コウカシタ
創業スクール
2015

西条、大塚さんたち
コウシキ音楽スクールの第二弾、
ペースキップを主とする。
18才未満の演奏にはA4=440、
各分秒の第一線で活躍する
経験豊富な講師陣が前奏の楽器を担当。
この場所にも多くのお客さん、
熱心な方々を是非お招きしよう。

[illegible]

- 01 设计定位与策略
- 02 设计定位与策略
- 03 设计定位与策略
- 04 设计定位与策略

コウカシタ
KOKASHITA
スクール
SCHOOL
2017

実績

A collage of various Japanese magazines and book covers. The top row includes a cover with the title 'Hana to Yume' (花と夢) and another with 'Seiyu' (声優). Below these are several other covers, some featuring portraits of celebrities or characters, and others with abstract designs. The covers represent a mix of genres, including fashion, entertainment, and fiction.

[illegible][illegible][illegible]

ワークショップ

ワークショップ

1/4 (sat), 11 (sat), 25 (sat)
10:00 ~ 16:00

まちのインバージョン #2

これからの、
家と庭

IN THE FUTURE

TOGETHER

[illegible]

日本を地域に活かす事例展覧会
07/21(土) 10:00~16:00 入場無料
日本青年会議所 1F 03-3555-1100 受付・相談
〒100-0001 東京都千代田区千代田 1-1-1 日本青年会議所
7F 03-3555-1100 受付・相談

[illegible][illegible]

新都市中心を創る
新しいまちづくり

都市の中心部において、
新たな公共空間を創出し、
市民生活に貢献する。
環境と共生するまちづくり。

www.kaiyosha.co.jp/

不動産経済研究所のご案内

主催・共催イベント 合計 **70** 回

プログラム・イベント参加者 合計 **3,010** 名

- | | |
|--------------------------|-------------------------|
| ○未来キャンプ | ○ハタラクカイギ2017 |
| ○LOCAL GOOD COMPANY | ○コウカシタ創業スクール(2014-2016) |
| ○マルシェをつくるワークショップ | ○コウカシタスクール(2017, 2018) |
| ○マチコラボスクール | ○まちのインキュベーションゼミ #1 |
| ○小金井で起業した8人のものがたり展&起業ナイト | 「食べる」と「まち」のいい関係 |
| ○空き家を地域に活かす事例勉強会 | ○まちのインキュベーションゼミ #2 |
| ○サマーギャザリングinタチカワ | これからの、家と庭 |
| ○コウカシタこどもスクール | など |

2020年6月現在

Pick up

地域の人気ベーグル店ができるまで

M's oven 相原万里さん

シェアキッチン利用開始



自作ベーグルを手に、学園坂タウンキッチンを訪問。「まずは3ヶ月やってみる」と、2014年9月にスタート。

セミナーや勉強会でノウハウ習得

シェアキッチン利用者同士の勉強会や、セミナーに参加し、商品開発や経営面のレベルアップ。「マルシェをつくるワークショップ」に参加。



実践を繰り返す 試行錯誤の日々

「もう辞めたい…」と思うこともありながら、売上も上向きに。心配していた家族も理解してくれるようになる。

開業に向けて事業計画書を作成



念願の実店舗をオープン

自宅近くの駅前物件を借りて、2017年4月にオープン。地域の人々から愛される人気店に。



創業補助金説明会に参加し、開業に向けた資金調達を検討。申請書のチェックを繰り返し、計画作成に取り組む。



資産を活かし、 場を営む

郊外という住宅地において“働く”という営みに注力し、10のシェアオフィスやシェアキッチン等の施設をつくり、日々の運営を行ってきました。また、社会問題になっている空き家を、次の時代に活かすための取り組みもはじめています。次の10年、これまでの実績だけにとらわれず、暮らしに含まれる多様な営みのアップデートにチャレンジします。住む、働く、遊ぶ、学ぶ。日常の暮らしに新しい価値を作り出していきます。

オフィスやキッチンなどシェア施設の企画・運営 **10** 施設

東小金井事業創造センター
コ ト
KO-TO



ポ ー ト
PO-TO



マ ー ト
MA-TO



「くらしの現場でビジネスをつくる」

小金井市が設置した公共施設。シェアオフィスとして利用されるほか、創業相談や、セミナー・スクールなどを開催。

契約者数 **62** 2014年4月開設

「オフィスをひらこう」

20の小さな専有個室と12のデスクからなるJR中央線高架下の施設。小売店舗やショールーム、事務所などとして利用。

契約者数 **32** 2017年9月開設

「つくり手たちの市場」

飲食、小売、教室、工房などが集まる複合シェア施設。KO-TO、PO-TOと連なり、合わせて100者以上の創業者が集まる。

契約者数 **39** 2019年3月開設

学園坂タウンキッチン



ハチケ
8 K



ネスティングパーク黒川



「食の小商いプロジェクト」

タウンキッチン初の拠点として2010年にオープン。近隣に住む主婦らが自慢の料理を提供。現在はシェアキッチンに。

契約者数 **7** 2010年11月開設

「小さなお店をはじめよう」

6坪の倉庫をシェアキッチンにリノベーション。道に面したカウンターを使い、パン、焼き菓子など、曜日や時間ごとに異なるお店として運営。

契約者数 **8** 2017年3月開設

「働く、遊ぶ、暮らすのあいだ」

小田急電鉄を事業主とする駅前再開発プロジェクト。その中核施設であるシェアオフィスCABINの企画運営を担当。

契約者数 **30** 2019年5月開設

テキスト
立川シェアオフィス TXT



「まちとのコラボを生むシェアオフィス」

東京・多摩のターミナルシティである立川駅から徒歩圏。地元まちづくり会社との連携によるコワーキングオフィス。

契約者数 **17** 2014年4月開設

コダチ
立川シェアオフィス KODACHI



「多摩産材のプライベートブース」

TXTと同じマンションの一室をリノベーション。多摩産のヒノキ・スギに囲まれた木のぬくもり溢れるシェアオフィス。

契約者数 **11** 2016年4月開設

東京学芸大学図書館カフェ
ノートカフェ
note cafe



「創造的な学びと気付きの場」

国立大学の附属図書館内にあるベーカーリーカフェ。大学と地域の垣根を超え、多様な人と情報が行き交うことを目指す。

年間利用客数 **62,826** 2015年6月開設



Pick up

郊外の団地再生事業と
連動した創業支援施設

ヒバリドゥ
HIBARIDO

「団地の真ん中で、しごとをつくる」

ひばりが丘団地の再生事業における住民コミュニティ支援を目的に、分譲マンション敷地内にある2階建ての建物を、シェアキッチン、ショップ、ワークスペースで構成されたシェアデパートメントとして開設。西東京市創業サポート施設開設支援事業に採択。2018年グッドデザイン賞。

契約者数 **37** 2018年3月開設



情報と経済を、 循環させる

地域の活性化には、情報や経済の循環が重要です。
たとえば、まちの情報、まちで働く人、まちの資産。
タウンキッチンだけで成し遂げられることは小さく
とも、地域の土台を支えるインフラ企業や金融機
関などとのパートナーシップを図ることで、その流
れは大きなものへと成長します。

これからは、より多様なパートナーと、人とまちの
関係を再構築していきます。メーカー、通信、物流
など、暮らしを支える多様な企業や団体と共に、
地域の文化醸成に取り組んでいきます。

実績

事業をはじめる第一歩

店舗・事務所にに関する相談

合計 **223** 件

物件紹介だけでなく、事業計画の助言や創業後の経営相談まで、プラン実現に向けた総合的なサポートを行っています。DIY可能な物件や店舗併用住居など、相談者のこだわりやイメージを踏まえた提案をしています。

所有する物件を地域のために

物件オーナー相談

合計 **22** 件

「相続予定の物件がある」「現状の家屋を活かしたい」等、物件所有者の多様なニーズに対し、土地や建物の個性を活かしながら、リノベーションによる利活用の提案や自社でのサブリース、起業家とのマッチングなどを行っています。

まちを知れば暮らしも豊かに

まち歩きツアー 合計 **11** 回 参加者 **98** 名

空き物件を巡るツアーを定期開催。まちの特徴や近くの人気店など、物件にとどまらない情報を伝えたり、建築家を招いて場づくりについて考え、人とまちをつなぐ一歩目の機会を創出しています。

- ・空き物件を巡る旅 古き良き商店街が広がる「新小金井」
- ・個性ある空間のつくり方を考えるトーク&ツアー
- ・オンラインツアー「家庭菜園のできる家」



リリザリ

記事掲載数 **231** 件

— NEIGHBOR MAGAZINE —

“そばで はたらく”をテーマに、はたらき方を考えるウェブメディアとして2017年スタート。創業者を中心に地域の人を紹介することで、地域への興味関心や愛着を高めると同時に、新しい担い手を発掘するための機運醸成を目指しています。



人が集うリヤカー店舗の
はじめ方



天然酵母パンが
人生を切り拓く



【編集長の酒場談義】
“認知症”の届け人

Pick up

行政・企業との協働による 郊外まちづくりプラットフォーム

「東京都 インキュベーションHUB推進プロジェクト事業」

地域に根ざした鉄道会社・金融機関と連携体を組成し、郊外のまちづくりを行うプロジェクト。それぞれの強みやネットワークを活かしながら、地域におけるハブの役割を果たし、市民起業家によるスモールビジネスを通じたまちづくりを推進しています。

TOWN
KITCHEN

nonowa
経・人・街 つながる

多摩信用金庫

HERE

ちょうどいい郊外
here-kougai.com

PROGRAM



チームを作って実践までチャレンジするゼミ、各分野の実践者のトークイベントをはじめ、フォーラム、セミナー、個別相談など、アイデアをカタチに育てるプログラムが多数。

PROPERTY



住居・店舗・事務所などの物件紹介、空間や場づくりの提案、空き家の利活用相談を行います。物件をお探しの方、空き家を所有されている方などのご相談をお受けしています。

MAGAZINE



“そばで はたらく”をテーマに、職近接な暮らし方、身の丈ではじめる小商い、地域問題の解決に取り組む事業など、郊外の多様なはたらき方をご紹介します。

SHARE



空間や設備を共有利用し、負担軽く、事業やお店をはじめられる施設をご紹介します。業務用設備が揃ったシェアキッチン、24時間365日使えるシェアオフィスなどがあります。



これまでのこと、
これからのこと

－対談－

「10年経った今だから 改めて考えたい『まちづくり』論」

饗庭伸さん(東京都立大学教授)

—

「自治区の仕掛人と営みの支援者 それぞれの10年とまちづくり」

寺井元一さん(まちづくりエイティブ代表取締役)

—

「まちをおもしろくする フラットな関係の連鎖」

笹倉慎也さん・奈津美さん(HOUSEHOLD 代表)

10年経った今だから 改めて考えたい「まちづくり」論

「まちづくり」とは……？ 郊外において、人と地域との関係づくりに取り組んできたタウンキッチンの本質的な問いです。もしかすると、その答えを見出すための10年間だったのかもしれませんが。都市計画の専門家である、東京都立大学 都市環境科学研究科の饗庭伸教授と北池で語り合いました。

まちの経済を動かすしくみが変わってきた

——北池さんと饗庭先生は、谷保にある「やぼろじ」で出会ったと聞いています。2012年頃ですね。

饗庭 やぼろじは江戸時代から続く、旧家の敷地にある民家を活かした施設。10年ほど空き家だった住宅を、地域に開かれた場所にできないかと始めたプロジェクトでした。爆発的に増えていく空き家の問題を、行政だけでは解決しようがない。ならば都市を豊かにする形で何かできないかと考えていたところに、偶然が重なって始まったプロジェクトでした。

北池 立ち上げのタイミングに、知人を通じてご一緒させていただきました。

饗庭 企画を考えるワークショップを開いた当初、実はそんなに人が集まるとは思っていなかったのですが、若くて感度の高いプレイヤーが集まって来ました。持続するためには、ある程度お金が回るしくみにしたかったのですが、しっかりと経済活動ができる人たちでした。結果的にうまくいって、おもしろいことができたのは発見でした。

北池 “コミュニティビジネス”という言葉が広がった当時、いろいろな会合に行くと、自分よりも1世代も2世代も上の方が大半を占めていました。先生のおっしゃるようなプレイヤーは、まだまだ少なかったのかもしれませんが。

饗庭 ただ、今も行政の会議に出向くと、大学の先生や地域の重鎮みたいな人がズラリ、みたいなことはよくあります。

北池 最近では、若者を中心に地域への関心が広がった印象があります。大企業や有名企業に就職せず、NPOとかソーシャルビジネスといった分野に飛び込んで来る。3・11やリーマンショックなどの影響も、多分にあるように感じています。

饗庭 そうかもしれません。大学院を出てすぐに地域おこし協力隊になる人もいますけど、昔だと考えられなかったですからね。

——饗庭先生は先ほど、やぼろじの運営について「ある程度お金が回るしくみにしたかった」とお話されていました。少し表現を広げると、市民経済圏の創出ともいえます。

饗庭 私が研究者として動き始めた1990年代は、まちづくりにおけるお金の使い方の移行期でした。それまでは、公園や施設などのハードを市民参加型でつくることがゴールで、市民もそれで納

得していました。でも2000年代以降は、公園や施設をどう活かし、それに市民一人ひとりが自分の資源を組み合わせしていくかを考えることも大切だということになります。

北池 小さくても経済が回ってないと、立ち行かなくなってしまうからね。補助金などに頼っては、なくなった途端に終わってしまう。地域で活動することと経済を回すことは、同じフィールドで捉えていくことが大事だと思います。

饗庭 そうですね。人が替わっても安定的なサービスを持続的に提供する行政と比べて、地域のプレイヤーは本質的に安定的でも持続的でもないということには注意しないといけません。小さなNPO等は、自分たちが切り開いた活動を若い人に渡そうとしますが、世代間の物事の考え方に決定的な溝があることがあり、うまくいきません。その溝を頑張って埋めようとか、先代の思想を引き継ごうとかを、あまり意識しない方がうまくいくことが多いので、小さなNPO等が早い新陳代謝をしながら市民経済圏を構成しているというのが今の状態です。これは2000年代に小規模な社団であるNPOという形式が大流行したからで、例えばもし、1920年代の日本のように協同組合が流行していたら、違う市民経済圏になっていたでしょうね。協同組合はNPOよりも全体性を持って市民経済圏を組み立てられると思います。

北池 協同組合が、まちづくりと親和性が高いということでしょうか。

饗庭 関係を長きにわたって築き、持続的な経済サイクルを確実ににつくり上げるので、ややもたまして見えるかもしれない。でも、非常に地に足のついた活動だと思います。別の可能性として、例えば町内会や自治会が2000年代にもっと流行していたら、市民経済圏はまた違ったものになっていたはずだ。町内会や自治会は行政に対する政治的な力を持てるので、“市民政治経済圏”が出来ていたかもしれません。こういった、「ありえたかもしれない歴史」を妄想して、現在の市民経済圏を少し軌道修正してみてもいいと思います。

北池 地域活動イコール“ボランティア”みたいな感覚ではなく、経済活動が中心の企業活動とも違う。地域に暮らす人達で地域を運営していく、という感覚としくみが、これからのまちづくりに求められているということですね。

10年のつながりと広がりがマッチングをうまくした

——ところで饗庭先生にとって、“よいまち”ってどのようなものでしょう。

饗庭 ひとつは能動的な人に対し、公平に試す機会があることかな。がんばって暮らしを豊かにする、事業を成長させようという人たちが、アクションできるのが“よいまち”。例えば、北池さんって大阪出身だけれど、東京・小金井で活動していて、いわば“よそ者”にあたるわけですね。けれども、きちんと事業ができています。

北池 なるほど。



饗庭 もうひとつは、たいてい能動的でない人も、肩身の狭い思いをせずに健康的に暮らせることでしょうか。能動的な人を後押しできるのも“よいまち”、そうでない人の居場所が確保されているのも“よいまち”ということです。

北池 先生のお話を聞いて、“まちづくり”という言葉も、行き着くところは“人”なのかなと。人は地域の資源であり、人材育成のニュアンスを多分に含んでいる。人のディベロップメントが重要じゃないかと思っています。

饗庭 よくヒト・モノ・カネって言いますが、基本はヒトとモノなんです。お金って、ヒトとモノの代替手段に過ぎないですから。そしてヒトとモノの需給バランスがとれて、うまくいきわたっている状態が地域社会にとって望ましい。まちづくりとは、お金を潤滑油にヒトとモノの関係を最適化することなのだと思います。要はマッチングですね。

北池 そのマッチングというのが、一筋縄ではいかないとも感じています。合理的にしようとしても、人には感情があり、理屈だけでは動かない。楽しさ、美しさ、気持ちよさといった部分が大事だと痛感します。加えて、それをマネジメントしようすると、めちゃくちゃ消耗する。あるとき、逆のスタンスに変えたらうまくいったんです。ヒトはやりたいと思ったことしかやらないので、周囲がおせっかいを言いすぎない。そのスタンスの中でマッチングを図っていくようにしています。

饗庭 それは高度で、マッチングをしすぎないマッチングができるようになったと言えますね。タウンキッチンも10年続けてきたことで、マッチングがうまくなった、ということだと思いますよ。地域のヒトとモノをよく知る存在として、より複雑なことができるようになったのかと。

北池 そう言っていただけると、少し自信になります(笑) 一方、行政や大企業からいただくご相談は、“人”に着目せず、理論上の方程式が重要視されていることも多くあります。庁内や社内の決裁が通らないんですよね。でも、やはり理論だけで押し通そうとしてもうまくいかないことが多く、モヤモヤを感じてしまいます。

饗庭 タウンキッチンの事業は、マッチングという言葉の枠組みでは足りないのかもしれないですね。そんな単純じゃないというか。

北池 行政や企業からご相談いただくことが増えてきたのはうれしいです。中には「この地域をこうしたい」という思いが出発点の方もおられて、そういった方のご相談は非常に楽しいです。一緒に考えて考えることは、私たちにとって幸せな瞬間であり、これからも続けていきたいですね。

じんわりとそのまちのサイズでナレッジを伝播するコツとは

——あるまちの成功事例が、違うまちでは参考にならない、というのはよくある話です。一方で、知見のシェアは欠かせないはず。タウンキッチンも10年を迎え、ナレッジが蓄積されています。普及には何がポイントになるのでしょうか。

饗庭 僕のような研究者が話すときは、どうしても概論的になってしまいますので、役に立つナレッジは伝えられないです。実践知は、体を使って伝えるほかない。

北池 先生が大きな方向性を示してくださり、それを現場で回していくのが私たちの役割なのかもしれませんね。難しいのは、現場を丸ごとコピー＆ペーストできない、ということ。フランチャイズ

ビジネスのようにお作法を全部マニュアル化していくというのを、まちづくりに当てはめるのは難しい。

饗庭 やはりそのまちのサイズで置き換えたら、というプロセスが必要なのでしょうね。まちって結局、一気に変わることはないですから、人を介してじわじわと伝播するものなのかなと思います。

北池 暮らす人が主人公なので、それを無視して、外から来たコンサルタントが脚本をいくら書いてもうまくいかない。一方、主人公だけで物語をつくろうとしても、それはそれでうまくいかない。両方が大切な存在であり、役割分担が必要なのでしょうね。

——饗庭先生のご専門である都市計画の観点から、タウンキッチンをどのような位置づけにあると捉えていらっしゃるのでしょうか。

饗庭 近代都市計画の役割は空間の関係を整えることです。住宅を中心とした暮らしの空間、第一次から第三次までの産業の空間、つまり農業や工業や商業などの働く空間、そして“自然”のそれぞれが混ざらないように分けましょうというのがこれまでの近代都市計画がやってきたことです。混ざることによって起きる問題は殆どなくなり、逆に寂しくなってきたので、今は、それぞれをどう混ぜていくかを模索している時代です。

北池 東京の郊外だと、住宅地の中に畑があるし、商業も混在しています。

饗庭 タウンキッチンは、住宅、第一次産業、第三次産業、という3つを扱っていて、絶妙なバランスを試しているのが興味深いと思っています。別々だった空間が一緒になることで生まれる価値は、必ずあると思うんです。あとは、第二次産業が入ってくると、もっと面白くなるなと思っていて、北池さん、何かやりませんか？

北池 やりたくなくてきちゃいました(笑) 一方、都市計画法が絡んできて、郊外は住宅しかつくりないう途地域が多く、空間を混ぜ合わせることの難しさもあります。

饗庭 意外と自治体との交渉で、何とかなる部分もありそうですけどね。法律も変わってきましたし、市の裁量が大きくなってきていますから。意外と、担当者が気づいていないことも多いんです。

北池 そうなんです。これまで創業支援や空き家利活用など、いろいろな角度からまちづくりに取り組んできましたが、先生のおっしゃるとおり、別々だったヒトやモノが一緒になることで、新しい価値は生まれてくることを実感しています。次の10年も、まちの素材を混ぜ合わせることで、価値を生み出していければと思います。今日はありがとうございます。

饗庭 伸

1971年生まれ。東京都立大学 都市環境学部 都市政策科学科/都市環境科学研究科 都市政策科学域 教授。長年にわたり、都市計画とデザイン及び、まちづくりにまつわる市民参加の手法、市民自治の制度、NPOなどを研究する。岩手県大船渡市、山形県鶴岡市、東京都世田谷区明大前駅前地区、中央区晴海地区、日野市、国立市、多摩市など、まちづくりプロジェクトに専門家の立場で多く携わる。



自治区の仕掛人と営みの支援者

それぞれの10年とまちづくり

北池がタウンキッチンを創業した2010年。時を同じくして千葉の松戸にまちづくり会社を立ち上げた、まちづくりエイティブ代表の寺井元一さん。同世代、東京郊外が拠点など共通項の多いふたりですが、今日までの10年という時間をそれぞれどのように過ごしてきたのでしょうか。まちづくりの仕事、組織のありかた、行政や企業との共創まで、過去を振り返り今思うことを語っていただきました。

渋谷から松戸と小金井へ、郊外に移るふたりの分岐点

——北池さんは、寺井さんが設立されたNPOで一緒にされていたそうですね。

北池 私が会社を辞めた2008年は、社会起業が流行った頃でもありました。たまたま手にとった本に、寺井さんが紹介されていたんです。おもしろい事業だと思って、ラブレターを送りました。

寺井 学生時代に立ち上げた、コンポジションというNPOをやっていました。渋谷でアートやスポーツとまちの資源を融合させ、若者の活躍を応援する活動です。ビルの壁面をキャンバスにしたアート活動や、代々木公園を使ったストリートバスケの大会などを行っていました。

北池 インターンシップとして関わらせてもらいましたが、それまで会社員だった僕にとってはすべてが新鮮だったな。NPOという組織がどういうものなのか、社会起業って何なのかを肌身で感じることができました。安っぽく聞こえてしまうけど、寺井さんをはじめ、理事の人たちみんなが若くて、センスがよくて、エネルギーがすごい。それからブレない軸のようなものを持ち合わせていたのが、印象的でした。

寺井 でもNPOを10年ほど続けてみて、限界を感じているタイミングでもあったんです。自分が理想とする活動ができなくて、今後はまちづくりをしなくちゃって。

北池 当時から、寺井さんは「自治区をつくる」って話していましたものね。

寺井 その実現に向け立ち上げたのが、「まちづくりエイティブ」です。松戸にはキタさん(北池)とも行きましたよね？

北池 そうそう！ 駅前のマクドナルドで作戦会議して。僕もその頃に、ずっと温めていたタウンキッチンを立ち上げました。実は「タウンキッチン」という社名は、渋谷のコンポジションの事務所で考えて。「寺井さん、どう思う？」って相談したら「ええんちゃいますかー」みたいな感じで決まったのを覚えています(笑)

——ほぼ同じ時期に創業したことになりますが、この10年を振り返っていかがですか？

寺井 まちづくりエイティブは、前半と後半で結構変わったかな。

北池 はじめは、まちの有休不動産をクリエイターに貸し出す事業が軸でしたよね？

寺井 そうですね。駅周辺の半径500mを「MAD City」と銘打って、クリエイターを集めて活動をサポートしたり、空き家や空き店舗を活用したりしていました。町内会とアートプロジェクトも立ち上げていましたね。

北池 それらの事業は、今も順調そうですね。

寺井 傍から見れば、そうかもしれない。でも僕の中では前半の5年は失敗でもありました。僕はMAD Cityを自治区にすることを、本気でめざしていました。だから町内会の人たちと、松戸ならではの価値を生み出すことまではできたのだと思います。けれども組織として自立的な運営をする、というところには至らなかったんですね。

北池 事業理念と経営経済の両輪を成り立たせる難しさがありますよね。タウンキッチンの場合は、はじめの3年が一区切りでした。創業時は「おすそわけ」をコンセプトに、地域の主婦によるボランティアな食事提供の場を運営していました。当時はメディアにもたくさん取り上げられ、表面上は成功しているように映っていたかもしれない。けれども、思い描いていた地域内のコミュニケーションを生み出すことができず、加えて、経営の実態も大ピンチで。結局、事業スキームを変える必要がありました。

寺井 そうだったんですね。まちづくりエィティブは、失敗から自前で稼ぐことの必要性を感じ、外に出ようと決めました。松戸に留まっているだけでは、頭打ちになってしまうという危機感もあって。いろんな人からのご紹介もあり、佐賀県武雄市やJR埼京線をフィールドにしたまちづくり事業が生まれました。

北池 武雄市では、どんな事業を？

寺井 3年から5年で、自治体や企業に依存しない事業に育てあげることを前提に考えていました。それで、松戸と同様の不動産のサブリースをはじめたんですが、これがうまくいかない。地価や土地に対する考え方があまりにも違っていて、それだけだとうまく回らなかったんです。

北池 東京郊外と地方だと、不動産の経済的価値も違いますよね。

寺井 それで行きついたのが、“焼きもの”でした。武雄周辺にはたくさんの窯元があり、今は有田焼の大きな窯元と一緒に作品づくりをしています。有田焼に使われる器の型は非常に高価なのですが、絵つけの柄が時代とマッチせず、多くの型が倉庫に眠っている状態でした。そこでアーティ





ストが絵柄をデザインし、器に新しい息を吹き込もうという試みを始めました。これが事業として成長しつつあります。

北池 焼きもの文化とアーティストをかけ合わせることで、まちの資産が活きてくるんですね。

寺井 だから結局僕たちって、不動産屋さんじゃなかった。世界中のおもしろいことができる人たちと関係を築き、それをまちづくりと絡めて事業を編み出すこと、まちの遊休資産を使って経済圏と文化圏を融合させることが、僕らの事業の核だったんです。

北池 松戸の外に出たからこそ、気づくことができたのですね。

寺井 ところでキタさんのところの事業は、今は創業支援やコワーキングが軸ですね。

北池 そうです。創業当初は、地域住民の関係性の再構築を、“食”というツールを用いて事業化することを考えていました。でもやりながら、食じゃなくても別にいいと思うようになって。ツールは何でも構わない、大事なのは地域のプレイヤーとなる“人”じゃないかと気づき始めた。それで地域の人材育成というか、一人ひとりのやりたいアイデアを応援する事業へとシフトしていきました。今のような形に行き着くとは、創業した10年前にはまったく想像してなかったなあ。

ビジョンの違いをふまえ共創できたらおもしろい

——10年の実績を経て、事業を広く展開することも視野に入れているのでしょうか。

北池 寺井さんが武雄に出た時、これからいろんな地方にガンガン攻めるのかと思ったら、意外とそうでもなかった。やっぱり横展開は難しいですか。

寺井 コンサルタントの立場で短期的に関わるやり方もあるかもしれませんが、でも僕らは、もっと長いスパンでまちづくりを捉えているつもりです。

北池 分かります。まちにはそれぞれ個性があるわけで、そのまちにコミットするには一定の時間が必要ですよ。企業や自治体からは、どのような形で相談を受けることが多いですか。

寺井 いろいろですよ。いちばんモチベーションが上がるのは、まっさらな状態で「一緒に考えてください」というケースかな。逆に枠組みが決まっていて、「この部分だけお願い」というのはやる気を失くす。まあ僕らはそもそも、言われたとおりにはやらないですけどね(笑)

北池 分かるー！ でもまちづくりクリエイティブの活動って、複雑ですよ。企業や行政からはどのように映っているのですね。依頼する側にリテラシーが求められるというか。

寺井 以前は“アートと不動産”と、明確な構図でしたけど。今は“カオス”なのかな？（笑）でも、あえて分かりやすくすることもないと思っています。

北池 分かりにくさは、必ずしもネガティブではないですね。極論を言えば、自分たちのよさや強みを活かせる人にさえ、分かってもらえれば十分なものかもしれません。僕たちの会社もここ数年でお引き合いが格段に増えています。中には事前にいろいろ調べたり小金井に足を運んだりして、僕らのイメージをある程度つかんでから相談くださる方もいる。その場合の方が、いいパートナーシップを築けていると感じますね。

——おふたりは事業を通じ、まちがどうなることを望んでいるのでしょうか。

寺井 僕の究極は、やはり「自治区をつくる」なんです。それぞれのまちの住人が、やっていいことや悪いことを自分たちで考えられる、議論できる、そして変えることができるまち。ルールはまちごとに違ってよくて、むしろいろんな社会のバリエーションがあればあるほどいい。そして一人ひとりが自分に合った場所で、自分の可能性を最大化できるようにすることが、僕の使命なのかなって。

北池 僕は起業したときに、仕事と暮らしを分断しないと決めました。自分や周りの人の暮らしが豊かになる仕事をつくることが出発点だから、今も小金井に住み、小金井で働いています。

寺井 そこはキタさんとは明らかに違うよね。僕はまちづくり自体がアイデンティティだから、自分が住んでいなくても構わない。だから自宅も松戸にはないし、武雄にも飛んで行くわけで。

北池 僕も、どこか遠いまちに自分と同じように考えて、同じビジョンを描く人が住んでいたとしたら、ぜひ一緒に仕事したい。そうしたキープレイヤーと、そのまちに住む人が主人公になる仕掛けをどんどん編み出していきたいですね。

寺井 まちづくりをミクロで捉えると、思想もアプローチも独自のものと分かります。けれども表面的には、同じように見えてしまうところがある。今後はそうした違いも踏まえて、一緒にできる企業や行政が増えるといいですね。

北池 おっしゃるとおりです。寺井さんの描くビジョンに共感し、コンポジションの門を叩いたのが10年前。そのときの思想の根っこ部分は、今も変わっていない気がする。それは、「まちに住む人たちが、自ら考え、アクションを起こせる社会を築くこと」じゃないかと思います。それぞれのまちで、互いの違いや個性を打ち出しつつ、大切な価値観を広めていきたいですね。僕も改めてがんばろうって、刺激になりました。また10年後にお話を聞かせてください！



寺井 元一

1977年生まれ。早稲田大学大学院在学中にNPO法人KOMPOSITIONを設立。渋谷を拠点に、公共空間の利活用と若者支援、社会課題に関わる。2010年、株式会社まちづくりエイティブを設立し、千葉県松戸市を拠点に事業を開始。不動産とクリエイターのコラボレーションによる自立型の地域活性モデルを創出。その後、佐賀県武雄市、JR埼京線沿線など、各地の地域活性化プロジェクトを生み出している。

まちをおもしろくする フラットな関係の連鎖

富山県氷見市。美しい海と寒鰯が有名なこのまちで、宿とギャラリー、そして喫茶を営む笹倉慎也さん・奈津美さん夫妻。7年前にタウンキッチンのワークショップに参加したのち、地域との心地よい関わり方を見出しました。北池が“同志”と呼ぶふたり。対談を通じ、その理由が見えてきました。

内なる情熱を形にしたらまちはおもしろくなる

——タウンキッチンとの出会いは、7年前に開催したプログラムだったそうですね。

北池 そうそう。まちで何かしたい人のためのゼミ形式のワークショップを「ちいきのえんがわ教室」という名前でやっていました。

奈津美 ささやん(慎也さん)に「これおもしろそう!」って教えて。珍しくリアクションがよかった(笑)

北池 その頃、ささやんは大手の印刷会社にて、なっちゃん(奈津美さん)はコンサル会社でゴリゴリとやって。世間的に見れば順風満帆なキャリアだね。

奈津美 でもずっと続ける気はなかったな。一緒に何かしたいねって話してたタイミングだったかな。当時は、吉祥寺あたりでゲストハウスを開けたらとか。

慎也 5年くらい働いて、今のままでいいのかという漠然とした迷いはありましたね。ちょうど帰省中にえんがわ教室のことを知って、富山で何かを始めるのもいいなあと。

北池 何となくやりたいことはあって、でも、どう始めたらいいのかわからない、って人がすごく多いと思っていた。アイデアをカタチにしていったら絶対おもしろくなるのに、みんな思いに蓋をしてしまう。それがもったいなくて教室を始めてみたけど、今では卒業生たちが地域でどんどんおもしろいことを始めているよね。

奈津美 何かを教わる場じゃないところに惹かれました。会いたい人に会いに行け、やりたいことを試せ、っていうのがよかった。

慎也 同期も熱量が高くて、おもしろい人がいっぱいでした。最初の飲み会で号泣する人とか。超エリートな人でも人生迷うんだって思いましたね。

奈津美 その頃は北池さんも会社をおひとりでやっていたんですね。やりがいはあるけど、すごく大変みたいなお話をしてくれて安心した記憶があります。かつこつけずに、ありのままであればいいんだって。家に帰るとふたりで北池さんのものまねしたよね!「根っこにあるものは何なんやー!」って(笑)

北池 おれ、そんなこと言ってたっけ?





慎也 そうそう。よく覚えてます。

奈津美 遠慮のない言葉が響いたんです。周りの人はだいたい「いいね!」「おもしろいね」と言ってくれるけど、北池さんはズバッと指摘してくれた。でも、どうしたらいいかは教えてくれないの(笑) だから自分たちも、すっごく考えた。北池さんの

ことを先生って思ったことは一度もないな。隣の部署の上司って感じ？

北池 うまいこと言ったね(笑) どうすればうまくいかなんて、誰にもわかんないから、教えようがないと思ってるんだよね。0から1を始めるときって、知識をいくら詰め込んでもダメで。色んな人に話を聞いたり、考えたプランを一度試しにやってみたり、その繰り返ししかないんじゃないかな。

慎也 教えられると、分かった気になってしまうんですね。始めてみて迷うこともいっぱいある。そのときの支えのほうが、ずっと大事に感じます。逆にスタートは、やりたいことを後押ししてくれる人が欲しい。北池さんは、まさにそういう存在でした。

飾らない日常にある奥深さをシェアしたい

———慎也さんと奈津美さんは、どのようにして氷見でHOUSEHOLDを始めたのですか。

奈津美 氷見の美しい景色に魚をはじめとする豊かな食、何気ないけどゆっくりと移ろう日常に魅せられました。海の見えるところに住みたいと思っていた時、今の建物を見つけたんです。以前は呉服店だったビルで、空き家になっていて。オーナーに貸してほしいと交渉するために、わたしは会社員の時のようにパワポの企画書をつくって臨んだのだけど、全然響かず。結局、ささやんがおじさんの話の聞き手にまわり、がまん強くつき合ったことで、こいつなら大丈夫とおじさんの心を掴んだからか、いつのまにか譲ってもらうという話になっていました。

北池 おじさんの前では、パワポは無力やね(笑)

慎也 その後、建物をリノベーションして開業しました。1階に喫茶と宿泊者用のダイニングキッチン併設し、2階にギャラリー、4階が客室。宿泊は1日2組限定です。

奈津美 コンセプトは、「勝手口からの旅」。釣りやサイクリングに、海辺を散歩してもいいし、夕食は宿泊ゲスト自身で地元の食材を調理する、あるいは近所のお店に足を運ぶの也有りです。

北池 伝えたいメッセージやコンセプトを伝えるために、工夫していることはある？

慎也 設計やデザインなどを整えて、素敵だなんて思ってもらえることは大事な。でもねらいは別のところであって、氷见到住んでいる人たちの飾らない日常をシェアすることをつき詰めた形がこれだったんです。

奈津美 このまちって、実は“おじさん”が貴重な資源なんですよ。漁師や寿司屋の大将、うどん屋の店主とか、武骨だけど、どことなく可愛い。

北池 前に泊らせてもらったとき、近くの寿司屋さんに連れていってくれたよね。その日は大将がちょっと不機嫌そうだったんだけど、帰り際にささやんとなつちゃんて「多分奥さんとケンカしちゃったんです。いつもはこんなじゃないんです」ってフォローしてたのが、印象的だった(笑)

奈津美 おじさんたちって、泊まりに来た人のことをよく覚えているの。「あの子は前に、プリ食べたって言ってたな」って、次に訪れたときにもてなしてくれる。

慎也 HOUSEHOLDの宿泊ゲストはリピーターが多く、氷見に住む人たちのことを気にかけてくれる人ばかり。だから今年から会員制度も始めて、会報を通じて近況を伝える予定です。おじさん情報も含めて(笑)

北池 次も同じ寿司屋に行きたいな。今度こそ、ご機嫌のタイミングを狙って(笑) でも、そういう飾らない日常に価値があると思っていて、HOUSEHOLDはそれを表現しているのがすごいと思う。人と人の関係性を結んでいくプラットフォーム的な機能が、いろんなまちにあるといいよね。

好き嫌いがあるほうがその人を信頼できる

———それにしても、地域にうまく溶け込んでいますね。

北池 結婚式にも呼んでもらったけど、本当に地元の人たちに愛されているのが伝わって来たよ。でも、どうやって関係を築いたの？

奈津美 うーん……。お互い会社勤めもしていたから、好き勝手にやると波風が立つのは一応分かっている。まちのキーパーソンに筋を通すところは気をつけているけど、それだけじゃダメで、まちの営みに関わるのが大事な気がします。

慎也 お誘いがあれば、余程のことがない限り足を運びますよ。よくしていただいているとはいえ、“得体の知れない者”と思われているところはあるので。

奈津美 田舎ならではのコミュニケーションが存在するのも確か。SNSや電話で済むようなところを1時間コースで会いに行くし。

北池 やっぱり、情熱とロジックの両輪が必要なんだろうな。行政や地元団体等との関係づくりはうまいけど、やりたかったことからかけ離れてしまう人もいる。そのあたりのバランスが、ふたりは絶妙なんだろうね。中には合わないなっていう人もいるんじゃない？

奈津美 見境のない人はちょっと苦手かも(笑)「氷見のためにやることなら、オールOK!」みたいなのは、少し違うなって気がする。何かを一緒にするときには、共感できるかどうかを意識していますね。

慎也 少し不便だけど足を運びたい場所であり続けるには、“根っこ”を見失わずにいたことが大事なんだと思います。万人受けしないくらいがちょうどいいのかもしれない。みんなに愛されようとする、本当に自分たちがいいと思う価値も、届けられなくなってしまうと思う。

北池 分かるなあ。大多数を意識した途端、どんどん“ふつう”になっていっておもしろなくなってくる。例えば行政の仕事では、どこか既視感のある企画になってしまいがち。けれどこれからは、金太郎飴的なまちづくりをする時代でもないし、思い切って万人に受けようとしなくていいことが大事なのかもしれないね。

10年目に改めて問う「根っこは何なんや!?!」



——— 笹倉さんたちの活動は、観光業という枠組みを越えたものがありますね。

奈津美 最近やったのは、近所の豆腐屋さんのパッケージリニューアル。報酬は現物支給で(笑) ふたりともデザイナーではないけれど、まちの映り方をちょっとずつ変えることはできるかなって。

慎也 泊まりに来たのをきっかけに、移住した男の子がいます。スーパーの魚屋で働いていた経験を活かし、魚料理のケータリングや魚の捌き方から料理法まで教えるオンライン料理教室を始めました。とはいえ氷見にツテはなく、僕らが仲介役になって、物件を紹介したり、人をつなげたり、事業と一緒に考えたりしているところなんです。

北池 それって、もはや宿業を超えて、事業創造みたいなことだね。タウンキッチンのプログラムに参加してくれた人たちが、住んでいる場所で実践を形にして、さらに人が集まって…っていう循環が生まれているのは、本当にうれしい。

奈津美 あとは、移住のスタートアップ支援もできたらと考えています。今の取り組みが点だとしたら、それを線や面にして、氷見での暮らしの豊かさを共有できたらおもしろいなって。

慎也 今は宿業が収益の柱ですけど、他のやり方も取り入れながら、まちに仕掛けていきたいですね。

——— タウンキッチンが創立10周年を迎えました。おふたりからメッセージをどうぞ。

慎也 そうですね…。なぜ、11年目も続けるんですか？(笑)

北池 え！確かに。何でなんやろう？ まだまだできていないこともあるしなあ…(しばらく考え込む)。

奈津美 自分たち、今でも北池さんの顔を思い浮かべます。私はすぐに売上とか生々しいことに翻弄されがちなんですけど、そういうときに、ささやんが「根っこにあるのは何なんやー」って言うてくれるの。

慎也 現実を目の前に委縮してしまいそうな時に、「あそこでしょ！」って指をさしてくれるのが、あの時の北池さんの言葉だから。今、東京と氷見で離れているけれど、見るべき場所って同じなんですよ。北極星みたいに。

北池 たぶん、根っこがしっかりしていれば、多少の風や雨では倒れないんだよね。それって事業をしていくうえで、結構大切なことだと思うてる。創業時に考えていたことは今は通用しないし、今のアイデアも、10年後には陳腐化してる。ジグザクな道を歩んできたけれど、価値観や思いがブレたことはなかったと思うし、それをこの先も続けていくことは自然なことなのかな。

奈津美 北池さんがそんな北極星であってくると、私たちも氷見でがんばれそうです。

慎也 今日はありがとうございました。また、氷見に遊びに来てください。

笹倉 慎也・奈津美

慎也さん1983年生まれ、奈津美さん1986年生まれ。それぞれ進学・就職を機に上京し、「ちいさのえんがわ教室」にふたりで参加。以降も慎也さんは「コウカシタスクール」に参加するなど、暮らしと仕事の関係性を模索していく。2015年に共に富山へ移住。慎也さんの氷見市役所勤務を経て、2018年にHOUSEHOLD開業。観光と暮らしを融合させる手法に各方面の注目を集めている。



卸菓子司 龜屋

お取り扱い
生菓子
和菓子

栗むし羊羹

江戸
18-100

たくさんの皆さまのおかげで、
10周年を迎えることができました。
これまでご縁をいただいた全ての方に感謝申し上げます。
ありがとうございます。

先行きが見えない日々が続いています。
こんな状況になるとは、想像していませんでした。

私たちが20歳を迎えるとき、
どんな景色が待っているのでしょうか。

今を生き、今をたのしむ。
自分のそばにいる人を愛し、暮らすまちを愛する。
そんな日常の繰り返しを続けていくことができれば、
10年後も、きっと素敵な景色が広がっていると思います。

そのときに、また、
皆さまにお手紙をお届けできれば幸いです。

株式会社タウンキッチン

所在地 東京都小金井市梶野町1-2-36

創立日 2010年7月28日

代表者 北池 智一郎

社員数 19名(2020.7.28現在)

事例掲載・受賞歴(一部抜粋)

[メディア掲載]

- シェアキッチン特集／NHK総合テレビ ニュース シブ5時
- 駅にシェアオフィス／テレビ東京 ワールドビジネスサテライト
- 高架下で起業家支援 JR系など施設 雑貨や食品向け／日本経済新聞
- 小学生の店 作ろうよ／読売新聞

[書籍掲載]

- ソーシャルデザイン-社会をつくるグッドアイデア集／朝日出版社
- 日本のシビックエコノミー - 私たちが小さな経済を生み出す方法／フィルムアート社
- 地域発! つながる・集める施設のデザイン／パイインターナショナル
- 社会起業家になるには(なるにはBOOKS)／ペリかん社

[事例紹介]

- 地域課題を解決する中小企業・NPO 100の取組 - 中小企業白書／中小企業庁
- 創業支援等事業計画施策事例集／中小企業庁
- 新たな多摩のビジョン行動戦略 - 年次報告書2015／東京都

[受賞歴]

- グッドデザイン賞 2018年／日本デザイン振興会
- 多摩ブルー・グリーン賞 優秀賞 2019年／多摩信用金庫

発行日 2020年7月28日

発行人 北池 智一郎

編集 熊井 晃史

國廣 愛佳

執筆 たなべ やすこ (P22-33)

デザイン 丸山 晶崇

撮影 本浪 隆弘 (P02-03, P04, P12, P20-25, P34)

寺島 由里佳 (P06, P15)

伊藤 慈朗 (P07-08)

阿部 良寛 (P14-15)

仲 幸蔵 (P16)

鈴木 智哉 (P18)

T O W N
KITCHEN